

特別企画

アメリカの仏教専門誌「トライシクル」での
池田SGI会長へのインタビュー

「人間革命の信仰」

アメリカの仏教専門誌「トライシクル」(2008年冬季号Ⅱ第18巻2号／季刊)に、池田大作SGI(創価学会インタナショナル)会長へのインタビュー記事が掲載された。

記事のタイトルは「人間革命の信仰」(Faith in Revolution)。聞き手は、仏教研究家で、同誌の元編集長・客員編集者であるクラーク・ストランド氏である。

インタビューでは、日蓮仏法の唱題行の意義、煩惱即菩提ぼんのうそくぼだいの法理、立正安国と人間革命の理念、世界への布教の努力、法華経の「人間尊敬」の哲

学などが語られている。

ストランド氏は、アメリカにおける仏教理解は、これまで禅やタントラ仏教などが中心であり、日蓮仏法にはなじみが少なかったことから、本インタビューは「初めて日蓮仏法の真髓が語られた」ものとして大きな意義があると述べており、同誌の了解を得て、その全文を紹介する。

記事原文はトライシクル誌のウェブサイトにも掲載されている(<http://www.tricycle.com/interview/faith-revolution>)。

faith IN revolution



DAISAKU IKEDA is President of the Soka Gakkai International, the world's largest Buddhist lay group and America's most diverse. In a rare interview, Ikeda speaks to contributing editor Clark Strand about his organization's remarkable history, its oft-misunderstood practice, and what its members are really chanting for.

From Hollywood celebrities to renowned jazz musicians to everyday practitioners around the world, Soka Gakkai Buddhists are best known for their familiar chant, *Mandala-mandala-kyō*. What they are chanting is the Japanese title of the Lotus Sūtra, which posits that all of us—without exception—can attain enlightenment through faith in its teachings.

The Soka Gakkai (Value Creation Society) was founded in 1930 by Nichiren Buddhist monk Nikkyō Niikō, a Japanese educator whose teachings were strongly influenced by the teachings of Nichiren, a 13th-century Buddhist priest who sought to reform Japanese society by bringing its leadership in line with the Lotus Sūtra's teachings. Nikkyō was arrested under the Peace Preservation Act in 1942 by the Japanese government for refusing to collaborate with other Buddhist sects under the banner of State Shinto, a strategy challenging the authority of the military government. He died in prison a year later. After the war his disciple Jōsei Tōdō (1910–1982) turned the Soka Gakkai into a national phenomenon, increasing its membership exponentially and establishing it as a grassroots social movement that championed peace and the rights of ordinary people. At Tōdō's death in 1982, the task of spreading the Soka

Gakkai's Nichiren Buddhist teachings to the international community fell to Soka's disciple Daisaku Ikeda (b. 1925), who founded the Soka Gakkai International (SGI) on the Island of Guam in 1975.

With 11 million members in 192 countries, SGI is the world's largest Buddhist lay group and the largest, most extensively diverse Buddhist school in America, with its members gathered in 2,402 neighborhood discussion groups and nearly 300 community centers nationwide.

Among Western converts to Buddhism, there has always been a sharp divide between members of SGI and traditional imported students of traditions like Zen, Vipassana, and Mahayana. Students of the traditional approaches tend to know little, if anything, of SGI. So what is the practice of SGI? What are its teachings, and how do they account for its rapid spread in so many different cultures around the world?

This interview with SGI President Daisaku Ikeda, the first granted to any American magazine, was conducted this summer via email by contributing editor Clark Strand and translated by Andrew Fickett. It is the culmination of a year-long conversation with SGI's top leadership on the future of Buddhism as it relates to international dialogue and issues of pressing global concern.

Most Americans know little about Nichiren Buddhism, except that its followers chant *Mandala-mandala-kyō*, the title of the Lotus Sūtra. Could you help our readers to understand the role of this core practice in Nichiren Buddhism? Daisaku used the following analogy to explain the *daimoku*, or "Core Title," and how it works: "When a capital city rises, birds who are flying in the sky are cheering summer and gather around,

and when the birds flying in the sky gather around, the land on the river shores is joyous. When such our minds are united the Mystic Law, our Buddha nature, being summoned, will awesomely emerge."

"In other words, metaphorically, in call out the name of the Buddhahood within us and in all living beings. It is an act of faith in the universal Buddhahood, an act of looking through the fundamental

トライシクル誌の掲載ページ冒頭。写真は原稿執筆中の池田SGI会長

インタビュアー序文

池田大作氏は、世界最大の在家仏教団体であり、アメリカで最も多様性に富む仏教団体であるSGIの会長である。この貴重なインタビューで、池田氏はSGIの特筆すべき歴史、往々にして誤解されがちな信仰活動、そしてメンバーが何のために祈っているかについて、客員編集者クラーク・ストランド氏に答えている。

ハリウッドスターや著名なジャズミュージシャンから、世界中で日々信仰に励む人々まで、創価学会のメンバーは、彼らの唱える題目——南無妙法蓮華経——によって、最もよく知られている。彼らが唱えている題目は、日本語の（発音による）法華経の題号である。法華経は、その教えを信じることによって、我々は誰でも、例外なく必ず悟りに至ることができると思う。

創価学会（価値創造の団体）は、一九三〇年に、牧口常三郎（一八七一一一九四四）によって創立された。

牧口は、日蓮に強く影響を受け、自らの教育理論に反映した日本の教育者であった。日蓮は、法華經の教えを指導者に教えることによつて社会を改革することを目指した十三世紀の仏教僧である。一九四三年、牧口は、国家神道の下に他の宗派と合併することを拒否し、軍部権力に抵抗して、治安維持法により逮捕された。一年後、牧口は獄死する。

彼の弟子・戸田城聖（一九〇〇～一九五八）は、戦後、会員数を劇的に増やし、平和と庶民の権利を推進する草の根の民衆運動として創価学会を確立したが、それは国家的な社会現象といえるほどの発展であった。一九五八年に戸田が逝去した時、創価学会が信奉する日蓮仏法を世界へ広める使命は、戸田の弟子である池田大作（一九二八～）に引き継がれた。池田は、一九七五年、グアム島で創価学会インタナショナルを発足させた。

一九二カ国・地域に一二〇〇万人の会員を有するSGIは、世界最大の在家仏教団体であり、アメリカで最も人種的に多様な仏教団体である。全

米二六〇〇カ所で地域に根ざした座談会を開催し、約一〇〇の会館がある。

仏教に改宗した欧米人の中で、禪やヴィパッサナ（Vipassana／上座部系仏教）、ヴァジュラヤーナ（Vajrayana／タントラ仏教）などの瞑想を中心とした仏教徒とSGIメンバーとは、常に明確な一線を画してきた。瞑想中心の仏教徒は、SGIについてほとんど知らない。SGIの信仰とは何か？ その教えは？ そして、世界中の多様な文化圏に急速に広まった理由を、彼らはどう説明するのだろうか？

アメリカの雑誌で初となる池田大作SGI会長との本インタビュは、トライシクルの客員編集者クラーク・ストランド氏によつて、今夏（二〇〇八年夏）、メールを通して行われ、アンドリユー・ゲバート氏によつて翻訳された。本インタビュは、宗教間対話や差し迫る国際的問題にも関わる仏教の将来に向けた、SGI指導者との二年間にわたる交流の結晶である。

唱題行の意義

クラーク・ストランド アメリカ人の多くは、日蓮仏法についてほとんど何も知りませんが、信者が法華經の題目である「南無妙法蓮華經」を唱えるということは知っています。本誌の読者に、この日蓮仏法の中心的修行である「唱題行」の役割を説明していただけますか？

池田SGI会長 日蓮は、唱題行とその働きについて、譬えを使って次のようにわかりやすく説明しています。

「譬えは籠かごの中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し口に妙法をよび奉たてまつれば我が身の仏性ぶつしょうもよばれて必ず顕れ給ふ」（日蓮大聖人御書全集）五五七頁、以下、遺文の引用は同全集から）

「南無妙法蓮華經」と唱えることは、自身およびあらゆる衆生の仏性の名を唱えることを意味し

ます。それはまた、自他の仏性を信ずる「信の力」で、仏性の顕現を妨げる無明を打ち破り、自身の仏性を呼び顕すことを意味します。無明は、生命そなに具わる根源的な迷いであり、生死という人間の苦しみの根本原因です。ゆえに自分自身に例外なく具わっている仏性を呼び起こすならば、生死しじょうじ流転の迷いと苦悩にあえぐ生命を、永遠の真理と一体となつて躍動する「常樂我淨の生命」へと転換していくことができます。

ストランド これは一見すると、道元の「只管打坐ただざ」や法然の「称名念佛しょうみょうねんぶつ」のような、日本の鎌倉時代の専修教義（シングル・プラクティス・ティーチング）の一つのように見えます。

池田 あなたは、専修という観点から、日蓮の「唱題行」と、道元の「只管打坐」や法然の「称名念佛」などとの類似を指摘されました。専修という形の上の類似は、あるいは、鎌倉時代すなわち本格的

な武家政権が始まるという「時」がもたらしたのかも知れません。三者とも、「争いの時代をどう超えるか」という時代の課題を、意識的にせよ、無意識的にせよ、担っていたのでしょう。

道元の「只管打坐」の座禅は自身の仏性を顕すことを目指した「自力」仏教の代表とされます。また、法然の「称名念仏」は、他土^{たど}の仏の絶対的な力による救済を願う「他力」仏教の代表とされます。

一方、先に述べたように、日蓮の唱題行は「自身の中にあつて自身を超える力」としての仏性を発見し顕現する道です。日蓮は、「法華経は自力でもなければ他力でもない」と言っています。ある意味では、法華経は、「自力」仏教と「他力」仏教の両方の面を具えているといえるのです。

ストランド では、ある意味、法華経は、「自力」仏教・「他力」仏教両方の最高の形であると、会長はお考えですね。

池田 日蓮の教えは、非常に現実的であり、かつ誰もが挑戦できるものでした。したがって、民衆の生命に具わる大いなる力と智慧を開発し、民衆が「大我^{たいが}」を確立することによって争いの時代を乗り越えていくことを可能にしたのです。私は、この日蓮のとった方向性こそ、人類の未来を照らす思想的な力をもっていると確信しています。

祈りは「煩惱を満たすため」か

ストランド 日蓮仏法を信奉するSGメンバーは、仕事上の成功、健康、良き結婚から、世界平和まで、自分たちの望むものを手に入れるために、題目つまり「偉大な法華経の題号」を唱えます。しかし、伝統的観点からすると、煩惱を乗り越えるようとするのではなく、煩惱を満たすために祈るというのは、基本的な仏教教義とは異なるように見えます。ここには矛盾がないでしょうか？

池田 宗教の目的が、人間の幸福にあるとの考え

に立てば、その疑問は矛盾なく収まるでしょう。

大乘仏教の理想は、「自他ともの幸福」を実現することにあります。その理想を、どこまでも追求したのが法華経です。法華経は万人に仏性をみとめ、「万人成仏」すなわち、男性も女性も、学歴がある人もない人も、さらに人種・階層・出自や過去の経歴、文化的・社会的背景などに一切とらわれず、あらゆる人が仏になれることを宣言しました。その理想を「個々人の決意として」生き抜いていくことに、私どもが法華経の題目を唱えていく一つの意味があります。

ストランド それにしても、仏教の伝統は——大乘仏教の伝統でさえ——成仏するために出家を重要視してきました。法華経は、ある種の大衆化を目指しているのでしょうか？

池田 法華経は、少数の選ばれた修行者が、煩惱を克服しての安心^①を目指す出家仏教の在り方を

必ずしも否定しません。それが、大乘仏教という「智慧の道」(智慧波羅蜜^{はらみつ})に通ずる可能性をもっている限りにおいてです。しかし、煩惱を滅そうとする修行を自己目的化し、閉じられた安心を得て自己満足しても、それは一時的なものであり、決して仏と同じ真の満足を得たことにはならないとします。

このように「智慧の道」を、万人が実践できる「以信代慧」(信を以て慧に代う^{もつ})の道として初めて開いたのが日蓮です。日蓮仏法の「信心」に励むことによって、日常生活において起こるすべてのことを縁^{えん}として正しい「智慧」を起こしていけるのです。そして、このように煩惱の生活を営む衆生が現実^{じやうじやう}に智慧を顕^{あらわ}していくことに対して、日蓮は「煩惱即菩提^{ぼんのおうそくぼだい}」との名を用いました。

ストランド 今うかがったことについて、俗世の欲望のために唱題することで、どのように煩惱を菩提へと昇華していけるのか、日蓮仏法以外の仏

教徒の多くは理解するのが難しいと思いますが。

池田 難しいですが、大事な点なので、SGIメンバーも含めて、多くの仏教徒に理解していただきたいところです。日蓮仏法における唱題は、決して欲望充足のための呪術ではありません。真理を信じ、真理に一致していくための修行であり、日常生活の中で、煩惱に苦しみ、欲望充足に固執する自分、つまり「小我」を克服して、仏の智慧と慈悲を起こす「大我」へと変革していくための生命鍛錬であり、人間革命の道なのです。

大切なのは、煩惱に振り回される小我中心の自己を克服し、「自他ともの幸福」を目指しつつ現実の苦悩を克服していく大我中心の生き方を確立していくことではないでしょうか。

草創期の創価学会は、「貧乏人と病人の集まり」と嘲笑されました。私の恩師である戸田第二代会長は、逆にそれを誇りとして、悠然と言われました。「貧乏人と病人を救うのが本当の宗教だ。本

当の仏教だ。学会は庶民の味方である。不幸な人の味方なのだ。学会は、いかにののしられ、嘲笑されようとも、その人たちのために戦う。仏の目から見るならば、最高に崇高なことなのである」と。戦後の荒廃した日本を見つめた戸田会長は、これこそが最も崇高な行動として仏の眼に映ることを確信していました。

法華経は現世利益を否定しません。現世利益を期待して始めた人も、法華経の教えによって信仰を根幹とした生き方を確立していくことができます。そして、仏法に出あった時点で人生のどのような地点にいたように、またどのような人生の悩みや心配にとらわれていたように、信仰によって一步一步成長し、智慧の道を得ていけるのです。万人成仏を教える法華経を信じて、心を清浄にしていけば、その功德として、日常生活のあらゆる言動が仏法の根本精神に合致し、正しい生き方となるとも説かれています。法華経と日蓮仏法において、仏と凡夫の間に絶対的な隔^{へだ}たりはないのです。

no essential dichotomy between enlightenment and the lives of ordinary beings.

Western scholars have observed that Nichiren was the first Buddhist leader to speak with a truly prophetic voice, insisting that Japanese leaders embrace the dharma and make it a social reality. What inspired Nichiren to take such a bold step, risking his life to assert a Buddhist vision of society in a country where religion had traditionally been expected to support the existing power structure rather than hold it to account? You're right that in Japan religion has traditionally been expected to support authority. Nichiren's very different response to power holds a key to understanding his character.

Nichiren felt compassion for the sufferings of the common people and a sense of responsibility for doing something about this. And this empathy and earnest commitment to social transformation are at the very core of all Nichiren's actions.

Thirteenth-century Kamakura Japan was a terrible time to live. Life was constantly threatened by earthquakes, droughts, and other natural disasters, as well as famine, pestilence, and armed conflict. But neither the political nor the religious authorities of the day were able to see beyond their attachment to their own power and position to take effective action. The result was a pervasive sense of powerlessness and despair among the

changing the awareness of those at the top of the pyramid of power was essential. In the years that followed, in spite of persecution and the constant threat of assassination or execution, Nichiren fiercely maintained his independence, insisting on holding those in power to account. He gained many adherents among the common people at this time by teaching them that happiness in this world was indeed possible. But his influence among the downtrodden sectors of society was naturally perceived as a threat by those in power.

Nichiren had clearly foreseen all of this, and his writings record with great frankness the doubts and questions that assailed him early in his career as he pondered whether or not he should speak out. At one point he confessed to a disciple: "I, Nichiren, am the only person in all Japan who understands this. But if I utter so much as a word concerning it, then parents, teachers, and teachers will surely censure me, and the ruler of the nation will take steps against me. On the other hand, I am fully aware that if I do not speak out I will be lacking in compassion." After a process of intense self-questioning, Nichiren recalled the words of the *Lotus Sutra* urging that this teaching be spread after the Buddha's passing, and he made a great vow to transform society and enable all people to live in happiness.

How did the Soka Gakkai take Nichiren's legacy forward? The Soka Gakkai's first leaders, Tsunesaburo



Jisei Tada (left), the second president of the Soka Gakkai, and Tsunesaburo Kikiguchi, the founding president, ca. 1930

In the *Lotus Sutra* and the teachings of Nichiren, there is no essential dichotomy between enlightenment and the lives of ordinary beings.

トライシクル誌から。文中写真は創価学会の牧口初代会長（右）と戸田第2代会長

日蓮仏法の社会性はどこから

ストランド 西洋の学者は、日蓮は、日本の国家指導者に対して本格的な警鐘的発言を行い、指導者たちがダルマ（法）に帰依し、法に則^{のつと}った社会を実現すべきであると主張した初めての仏教指導者であったと考えています。日本では伝統的に、宗教は既存の権力構造に対して糾弾^{きゆうたん}するのではなく、それを支えることが期待されていました。しかし日蓮は、仏教から観た社会のあるべき姿を命がけで訴えました。何が、日蓮をそこまで勇気ある行動に駆り立てたのでしょうか？

池田 あなたのおっしゃる通り、多くの日本の宗教は伝統的に権力構造を支えるものとして取り込まれてきました。日蓮の権力との対峙を読み解くことは、日蓮を理解する上での鍵となるでしょう。

日蓮を駆り立てたものは、「苦悩する民衆」を

救わんとする慈愛と責任感です。「民衆への同苦」と、それゆえの「社会変革への熱意」こそ日蓮の行動の根幹にあるものでした。

十三世紀、鎌倉時代の日本の庶民は、打ち続く自然災害、食糧不足、疫病の流行、戦乱などによって生活基盤を深刻に脅かされていました。しかし、政治権力者も、それに結びついていた腐敗した宗教者も、自分たちの地位を守ることに汲々とし、民衆を顧みることなく、社会には厭世観が漂い、民衆は無力化していった。日蓮は、そうした民衆の苦悩を見ることができなかった。ゆえに、既存の政治的・軍事的権力を恐れず、思想・言論の闘争に立ち上がったのです。

ストランド それは大変な危険を伴いますね。

池田 その通りです。日蓮は、その危険を理解していました。警世の書である「立正安国論」を一二六〇年に著した日蓮は、当時形成されつつあつ

た武家を頂点とする日本の封建社会において、為政者自身の意識を変革することが必要と考え、鎌倉幕府の実質的な最高指導者・北条時頼に立正安国論を提出しました。

「立正安国」とは、正法によって国（社会）の平和と繁栄を築くことです。その後、たび重なる暗殺の試みや流罪などの徹底した迫害にもかかわらず、日蓮は権力側に媚びずに、権力者の責任を追及しました。

日蓮は、現世救済の思想を説いて、当時の民衆の中から支持者を増やしました。社会から虐げられた階層への日蓮の影響力は、支配構造の維持にとって、脅威と受けとめられました。

これは日蓮にとって明らかに予想されたことでした。日蓮自身も、社会に警鐘を鳴らすべきか否か、深く悩んだ時期があったと述懐しています。人間味のある、赤裸々な心情の吐露であります。

日蓮はこう述べています。「人々の苦悩の根源を理解しているのは、日本において私ただ一人で

ある。しかし、これを説いていけば、父母、兄弟、師匠から非難され、国主からの迫害が襲ってくるであろう——『父母、兄弟、師匠に対して国主の迫害があるだろう』との解釈もあります——一方、もしこれを説かなければ、慈悲に欠けるであろう」（開目抄、趣意）と。

日蓮は、深い精神的逡巡^{しゆんじゆん}を経て、釈尊が「わが滅後に法華経を弘通^{くわうつう}せよ」と勧めた教えに思いをいたし、社会を変革し、万民を幸福にせんとの大誓願を立てたのです。

国家主義に抵抗、仏法の普遍性を宣揚

ストランド そうした日蓮の精神遺産を、創価学会はどのように発展させてきたのでしょうか？

池田 創価学会は、牧口常三郎、戸田城聖の両会長によって一九三〇年に創立されました。両会長とも日本の教育改革に献身する革新的な教育者でした。

一九二八年に牧口会長が日蓮仏法に帰依し、後に戸田会長も入信し、二人は在家仏教者として、現実生活に苦悩する民衆の幸福のために尽くしたのです。第二次世界大戦中、二人は、日本の軍国主義に抵抗し、戦争を進めるための国家神道による国民の精神支配に反対しました。そして、二人は逮捕・投獄され、牧口会長は栄養失調のため一九四四年に七三歳で獄死。出獄した戸田会長は、戦後の荒廃した日本で創価学会を再建しました。

ストランド しかし、創価学会の広める「平和」と「万人に開かれた人間主義」というメッセージに反対したのは、軍部政権だけではなかったのですね？

池田 その通りです。日蓮仏法は、日蓮の時代から七百年近くたち、民衆から遊離し、また近代において極めて国家主義的な解釈をされたこともありました。しかし、牧口会長は、日蓮仏法の本質

を一人一人の生命の変革を可能とする「人間の幸福のための宗教」として「再発見」しました。そして、その理念を基に、社会の基盤である小学校教育の改革から始め、広く民衆の生活改革へ、さらに社会変革へと展開したのです。

ストランド 日蓮仏法では、他のほとんどの仏教宗派のように、軍部政府の要請で戦争推進のために一致協力するようなことはなかったのですか？

池田 いえ、あの狂気の軍国主義の時代、牧口会長が所属していた日蓮正宗の宗門は権力の圧力に屈して、たとえば、日蓮の遺文から当局が問題視した部分を削除したり、教義を改変したりしました。対照的に、牧口会長は、最後まで日蓮仏法の魂、すなわち「民衆の幸福への人間的献身」を貫き、獄中で殉教しました。

ストランド 戦後に発展した創価学会の現代的で

グローバルな人間主義は、牧口会長の戦争に対する反対から「生まれた」ものとお考えですか？

池田 その通りでしょう。しかし、「啓発された」という表現のほうがよいかもしれません。なぜならば、人間主義の価値を守り通した牧口会長の闘争は私どもの永遠の模範だからです。

そして、その弟子であり、獄中闘争を乗り越えた戸田城聖第二代会長によって、仏教は現代に蘇生しました。戸田会長は獄中で、難解な法華経を身読し、「仏とは生命である」との仏教史を画する洞察を得ました。私は、この恩師の悟達によって、法華経のメッセージが異なる人種・宗教・文化的背景を超えて現代人に通用する普遍性を得て、人々に理解される哲理として、生き生きと現代に蘇生したと確信します。

また、戸田会長は、創価学会こそ日蓮仏法の真の継承者であるとの確信から、広宣流布への誓願を創価学会の魂として示しました。

I am confident that it
minating the path forward

daimoku to get what they
etter health, a good mar-
ertheless, from a purely
ould seem a violation of
ant for the satisfaction of
triving to overcome them.
ou think that the purpose
really is no contradiction.
hism is the realization of
others. Nowhere is this
in the *Lotus Sutra*, which
e in all people—women
education and those with-
e, without regard to their
al, or social background,
ur recitation of the title of
ewing our vow to live in

Daisaku Ikeda and his wife, Kaneko (second from left), visiting members
of the Soka Gakkai International in Tokyo in 1979



Buddhism

needs to encounter, learn, and evolve.

on—even the Mahayana
us on a monastic approach

I still think a lot of non-Nichiren Buddhists will have a
hard time understanding how chanting for earthly

Buddhism. The Soka Gakkai is the ally and friend of
the common people, a friend to the unhappy. However,

トライシクル誌から。文中写真は池田SGI会長夫妻とメンバーとの懇談風景
(1979年、東京)

戸田会長は日本を離れることはありませんでしたが、世界の平和を念願していました。さらに、戸田会長は亡くなる半年前の一九五七年九月、核兵器を人類の生存の権利を脅かす絶対悪と断じた「原水爆禁止宣言」を発表しました。

このように法華経の生命尊厳と平和のメッセージを世界に発信したのです。こうした戸田会長の業績にも、日蓮仏法の普遍化への大きな貢献がみられます。

ストランド しかし、創価学会を世界に発展させたのは、戸田会長ではありません。それは、創価学会インタナショナルを設立した池田SGI会長の使命だったと思いますが、どうでしょうか？

池田 私は、「先師、恩師の跡を受け継いだ第三代は、日蓮仏法における最良の精神的伝統の普遍化と永遠化に最も責任ある立場である」と自覚し、努力を重ねてきたつもりです。

恩師・戸田会長が一九五八年四月に亡くなる直前のことでした。私を枕元に呼び寄せて、「メキシコへ行った夢を見たよ。みんな待っていたよ。この仏法を求めてな」と言われました。

私は、日蓮仏法の教義解釈において、教義の本質的・普遍的部分と、文化的・時代的制約を反映した部分とを区別しようとしてきました。そのために、世界の幅広い人々との対話が続け、創価の哲学を普遍化し、その表現をより洗練しようと努めてきました。そして、「すべての偉大な文化や宗教は、深い人間性の表れである」との信念から、異なる文明圏の思想、文学、芸術、科学、医学などの分野の知見や、多様な宗教・文化的背景をもつ人々の教訓などと仏法との親近性・共通性を、創価学会の同志をはじめとして、広く紹介してまいりました。

ストランド アメリカ人学者のリチャード・シーガー (Richard Seager) が、創価学会に関する自著

の中で、日本とアメリカの創価大学のキャンパスで、ヴィクトル・ユゴーやウォルト・ホイットマンの像を見ることはできるが、伝統的な仏教を象徴する像などは何もないことに大変に驚いていました。

池田 イギリス人の哲学者ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead / 一八六一―一九四七年) は「宗教の諸原理は永遠的なものではあるが、これらの原理の表わし方は絶えず発展しなければならない」と述べています (ホワイトヘッド著作集第六巻『科学と近代世界』松籟社)。

これは、ダイナミックな生命哲学である仏法においても然りであると思います。ゆえに、次の千年にわたる仏教の発展のために、文化間の対話が極めて重要です。仏の英知が説き明かした永遠の真理は不変ですが、その実践のあり方は、様々な歴史的・文化的な相違に出あい、磨かれ、発展していくべきです。

その意味で、SGIがその重要な使命としている「再発見」「純化」「普遍化」の作業こそ、仏教の本質にかなうと確信します。

「人間革命」の連帯で「地球革命」を

ストランド 池田会長は、法華經の教えを、「人間革命」とおっしゃるプロセスで言い換えられました。この「人間」とは、池田会長の哲学である仏法人間主義に裏づけられた表現であると思いますが、「革命」が意味するところは何ですか？

SGIが実践する仏法の、より革命的部分とは何なのか、人間主義の宗教がどのようにそのような革命を可能にするのかを、ご説明ください。

池田 仏法は本来的に革新的な教えですが、中でも「成仏」ほど革新的な哲学はないと私は思うのです。

それは、自らの生命に内在する本来の自分に還^{かえ}ることであると同時に、自分自身のダイナミック

な変化を意味します。日蓮は「しを^潮のひると・みつと月の出づると・いと・夏と秋と冬と春とのさかひには必ず相違する事あり凡夫の仏になる又^境かくのごとし」（同一〇九一頁）と述べています。あらゆる障害を乗り越えて成仏していくよう励ましたのです。

創価学会における「人間革命」という表現は、私の師である戸田会長がよく使用され、それによって有名になりました。「成仏」を現代の言葉で表現したのです。

創価学会が提唱する「人間革命」の思想的基盤には、「人間自身が内面の精神変革を通して、真の生命の尊厳に目覚め、生命の軽視・不信の根本原因を克服することが、個人の幸福と社会の平和の基盤となる」という日蓮仏法の視座からの人類に対するメッセージがあります。日蓮仏法において、個人の幸福と社会の平和は深くつながっているのです。

戸田会長は、私たちにわかりやすく表現してい

ました。

「人間革命といっても、特別なことではない——今まで怠惰だった人間が勤勉になる。学問を求めなかった人間が学問に励むようになる。貧しい人が裕福になっていく——そういう人生の方向転換をすることです。仏法の実践による意識転換です」と。

ストランド そうですね。しかし、それは、多くのアメリカ人が理解している仏性の定義とは違っています。

池田 「成仏」は、日本・アジアの仏教界で死後の世界の問題であるかのように思われてきましたが、この「人間革命」という新しい概念を示したことによって、今世の人間完成の目標として明確化され、深化されたのです。

人間の一生とは、自分の能力と人格を自分らしく思う存分に開花させていくためにある、という

信条で私は生きてきました。

この「人間革命」の希望と「自己実現」の努力の連帯が地球規模で広がれば、やがて非暴力の「地球革命」を実現する王道となっていくでしょう。

グローバル時代が求める人間像

ストランド 法華経の最後のところで、釈迦牟尼^{しやかむに}は「若し^も是^この經典を受持せん者を見れば、当^{まさ}に起^たって遠く迎うべきこと、当に仏を敬^{うやま}うが如くすべし」と宣言しています。この釈迦牟尼の言葉をどう解釈されますか？

池田 この法華経の経文は、宗教共存の時代を生きる仏教徒にとつて、明確な指針すなわち「人間への尊敬」こそ仏法の結論であるということを教えています。

日蓮は、「当起^{とうき}遠迎^{おんこう}当如敬仏^{とうにょきょうぶつ}（当に起つて遠く迎うべきこと、当に仏を敬うが如くすべし）」の八文字

には、釈尊から未来の法華經の實踐者への「最上第一の相伝」が込められていると述べています。

法華經には、会う人ごとに「私は深く、あなた方を敬います。決して軽んじたり慢^{あなど}つたりいたしません。なぜなら、あなた方は皆、菩薩道の修行をして、必ず仏になることができるからです」と唱え、人々を礼拝し続けた「不輕菩薩^{ふきやうぼさつ}」が描かれています。

この「人間への尊敬」を實踐した「不輕菩薩」こそ、グローバルな時代を生きる現代仏教徒の模範の人間像ではないでしょうか。

大乘仏教によれば、我々が生きている時代は、末法と呼ばれています。末法とは「争いの時代」であり、あらゆるものが争いへと流されていく時代です。その激流に抗する力は、「自他の仏性を信ずる」という強い信念です。そして、その信念の實踐としての「人を敬う」行動以外にありません。

ストランド 法華經に説く「人を敬う」行動を、国際関係の現場では見ることができません。もちろん未来に対する希望はありますが……。

池田 まさにその「希望」を、仏法は育^{はぐく}むことができるのです。自他の仏性を信じ、仏に接するかなのような究極的尊敬をもって他者^{ひと}に関わっていく——この實踐こそが、自他^{みづか}ももの仏性を呼び覚ましていくのです。

日蓮が時に適^{かな}った實踐として提唱した「折伏^{しやくふく}」の意義もここににあります。相手の仏性を確信しているからこそ、慈悲を自身の心に湧き立たせ、自他ともに幸福になることを願いつつ、どこまでも相手を尊敬して誠実な對話を貫くのです。これこそが、一人から一人へと仏法を伝える、真の折伏精神です。信頼と友情に包まれた誠実な對話こそ、最も重要なのです。

「人間に対する尊敬」という慈悲の心の発現は、すべての人間に等しく具わった能力であり、希望

の源泉です。ここには宗教的信条の違いを超えた普遍の真理があると信じます。ゆえに、仏法者の人間に対する尊敬は、相手の宗教・信条を問いません。

日蓮は、それに関して、「鏡に向かって礼拝すると、その鏡の中の姿が自分に対して礼拝を返してくる」(御義口伝^{おんぎくでん}、趣意)というわかりやすい譬えを述べています。

これこそ、仏法の真の精神であり、大いなる「希望」の源なのです。